

アジア文化論 II：東南アジア古典文化論 ver2.1

アンコール王朝

- ・ アンコール：angkor < nagara （都）
- ・ クメール人の王朝の首都、トンレサップ湖の北岸
- ・ メコン河流域を拠点に、タイ湾をめぐる交通を支配
- ・ 9世紀初頭から15世紀中頃まで。ジャヤヴァルマン7世治世に最盛期。

《アンコール期以前》

■ 600年頃-800年頃 真臘（Chenla）王国

- ・ ヒンドゥー教、とくにシヴァ神信仰、リング崇拝。土着の信仰と接合
- ・ サンスクリット、南方ブラーフミー系文字による記録
- ・ メコン川デルタ地域は一時ジャワの勢力下だったと推定される（シャイレンドラ王朝？）

《アンコール期》

■ 802年 ジャヤヴァルマン2世「世界の王」宣言

- ・ ジャワの支配から独立、クメール王国の再統一
- ・ デーヴァ・ラージャ（devarāja）儀礼
- ・ 王はシヴァ神と同一視され、リング（linga）によって象徴される

■ スールヤヴァルマン2世（1113-45年）：アンコール・ワットの建設

- ・ アンコール・ワット：Angkor Wat（王都+寺院）
- ・ ヒンドゥー教寺院として建立、ヴィシュヌ信仰、一辺1.3km×1.4km
- ・ 『マハーバーラタ』『ラーマーヤナ』の浮き彫りなど
- ・ その後、16世紀に仏教寺院に改修、本堂のヴィシュヌ神像が仏像に置換される
- ・ 1632年、日本人森本右近太夫一房が参拝（祇園精舎と勘違い）

■ ジャヤヴァルマン7世（1181-1201年）：アンコール・トム建設

- ・ アンコール・トム：Angkor Thom（王都+大きい）
- ・ ジャヤヴァルマン7世は大乗仏教を信奉、自らを観世音菩薩に描く
- ・ 一辺3kmの堀と高さ8mの城壁に囲まれた方形の敷地
- ・ 中心にバイヨン寺院（トンレサップ湖でのチャンパーとの水上戦を描く）
- ・ 王の死後、仏教からヒンドゥー教へ回帰（仏像の破壊の痕跡）

■ 1296年 中国元朝の使節の来訪 周達観『真臘風土記』

- ・ 上座仏教とヒンドゥー教（シヴァ神への信仰）が共存
- ・ 14世紀後半以降、タイ人の王国が攻勢

■ 1432年 タイ人のアユタヤ朝、アンコールを攻略

- ・ クメールの王都はプノンペンに移動（以後、カンボジアとして知られる）
- ・ アンコールの文物をアユタヤに移送（アプサラ舞踊も）
- ・ 古典的インド文化はアンコールを経由してアユタヤ王朝に受容される。
- ・ 『ラーマーヤナ』はクメールの『ラーマキルティ』を経てタイの『ラーマキエン』に
- ・ バラモン僧による王の即位儀礼

参考文献

- 石澤良昭『アンコール・王たちの物語～碑文・発掘成果から読み解く』NHK出版、2005。
周達観・著、和田久徳・訳注『真臘風土記 アンコール期のカンボジア』（東洋文庫）平凡社、1989。



図1 (左) カンボジア

図2 (下) アンコール全体

